

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

当社では月に一度、全社員が集まって会議を行っています。

十月度の会議の時のことでした。いつもでしたら最後に会長の話があるのですが、あいにくその日は出張中で、私が話をすることになりました。

こういう不況の時期なので、話もついついきびしい口調になり、気合も入ってきて、社員たちの表情も真剣になっています。私は社員の皆さんと心が一つになったように語りかけていました。そんな時、横の方でクスクスと笑う声が聞こえました。

「**何がおかしい!**」私は思わずどなりました。見ると女子社員が三人、口をおさえていました。顔は真っ赤になっている。私の顔も真っ赤だったと思います。

「**今の話の中で何かおかしいところがあったか!**」。小さい声で「いいえ」

「**人が一生懸命、話をしているのにしゃべっておったのか!**」

「いいえ」。三人とも消え入るような声になってきた。

「**まあいい。だけど人が話をしている時は聞くのが礼儀。もう少しの辛抱やから最後まで話をききなはれ**」。その後、できるだけ冷静に話をしたつもりが、内心はおだやかでなかった。やはりこの頃の女の子にはああいう話は通じなかったのか。どんな話し方をすれば解ってもらえるのか。私の心の中は空虚な気持ちで一杯になっていた。

会議も終わり、二、三の人と部屋で話をしていると、先程の女子社員三人がおずおずと入ってきて、「**社長さん、会議の時は失礼しました。せっかくのお話を途中でこわしてすみませんでした**」

三人がそろって「すみませんでした」と言い目にうっすら涙をためている。



私はきてくれるとは思っていなかった。まして、あやまりに来てくれるとは思ってもいなかった。

ところで「**何で笑ろうたんや？**」そう聞くと、ひとりの子のお腹が鳴ったらしい。それをきいた両脇の二人が思わずふきだしてしまったという。箸がころげても笑う年頃。ましてやおなかガグルグル鳴れば、だれだって笑うにちがいない。話は十分聞いてくれたとのこと。

私は大きな声を出した自分が恥ずかしくなると同時に、もし女子社員が来てくれなかったら、彼女たちを誤解したままでいたかも知れない。勇気を出して来てくれた女子社員がすばらしい人にみえてきた。

「すみませんでした」

「いやこっちこそすまなんだ。ありがとう、ありがとう」私の声はいつのまにか涙声になっていた。

すがすがしい気持ちにさせてくれた彼女たちに感謝の念がわいてきた。同席していた人たちも多分同じように思ったに違いない。

(1993年・「ちょっといい話」)